

2019年度 立命館中高 附属校国語科公開授業研究会

附属校教育研究・研修センター

2019年6月20日(木)、立命館中学校・高等学校において「主体的・対話的で深い学びを目指した取り組み」をテーマとして、公開授業研究会が開催された。その一環として附属校国語科公開授業研究会を実施した。研究授業Ⅰ(中学3年生)、研究授業Ⅱ(高校3年生)の概要を報告する。

なお、附属校・提携校関係の参加者は、長岡京15名、小学校4名、宇治1名、慶祥2名、守山3名、平安女学院2名、センター1名、計28名であった。他校からの参加も多数あった。

◇【研究授業】

授業Ⅰ	中学3年生 「現代国語」	「文学の言葉を読む～短歌・俳句を使って～」 授業者：児玉健太郎
	テーマ	短歌・俳句を使ったアクティブラーニングの試み
	内容	書かれている言葉から書かれていないことを読みとる。作品の言葉を根拠に論理的に読み取ることで、これまでのものの見方・価値観が変革されます。対話的な授業をめざし、生徒が自主的に自分自身の読みを創っていく授業を目指します。
授業Ⅱ	高校3年生 「現代文B」	評論文 阿部健一「豊かさにつながり」 授業者：松室友香理
	テーマ	「本当の豊かさとは何なのか」自分たちにできることを考える機会にしよう。
	内容	環境破壊の要因を「貧困」と「豊かさ」という二面から捉えている作品です。「本当の豊かさとは何なのか」について作品を通して考え方を深め、身近な問題意識としての視点を養う機会にできればと考えています。

◇【研究授業Ⅰの様子】

生徒は4人のグループ形態で着席し、適宜グループでの話し合い活動が展開された。

授業は、初めに「表層の読み」として、作者についての基礎的知識や語句の意味の確認によって、短歌全体の意味を生徒に理解させ、その後、「深層の読み」として、「構成読み」「技法読み」といった読むための方法に基づいて短歌を読み解いていくという流れで行われた。

「構成読み」においては、まず教師から、短歌・俳句といった詩は、「起承転結」の構成になっているという説明があり、この短歌の「転」は一行目が最も長く、大きな区切り目となっていることから「ころびて」のあとが「転」であることが示された。

次に「技法読み」として、生徒たちにこの短歌にどのような表現技法が用いられているかを見つけ出す作業を、個人→グループ→発表→板書という流れで確認された。さらにこの短歌に用いられているそれぞれの技法からどのようなことが読み取れるかを話し合い、それぞれの班が発表した。各班から出された見解は、できるだけ生徒の発言に忠実に指導者が板書し、さらにクラス全体で検討を深めるという内容であった。

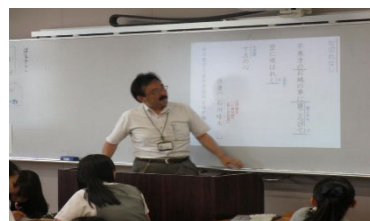
「空に吸われし／十五の心」の「心」とはどのようなものか。また、「不來方」という特別な呼称を用いている意味など、生徒からは異なる見解が出てきたものを、どのように解釈するのが妥当かをそれぞれ根拠を見つけ出しながら展開されていた。

◇【研究授業Ⅰの合評会】（司会 立命館中高 小山百恵）

<授業者のコメント>

中学3年生、MSコースは週5時間の「国語」を「現代文」（週3時間）と「古典」（週2時間）に分けている。今回の授業は「現代文」の授業で、小説教材が終わって俳句に入る前の投げ込み教材として石川啄木の「不来方のお城の草に寝ころびて／空に吸われし／十五の心」という有名な短歌を投げ込み教材として扱った。小説教材は部分部分の読み取りになりやすく、俳句は抽象度が高い。その点、短歌は文学言語を読む点で扱いやすい。2年生の教科書に掲載されている短歌であるが、同教材を学年を変えて読むことで読みが深まることはよくある。

「短歌」を授業で行うと、生徒は意味の方へ関心が行きやすい。授業では、虚構作品として、「隠喩」や「体言止め」などの技法や具体的な表現に即して読み取らせたかった。生徒たちはこの短歌に込められた「帰ってこない過去の寂しさ」など、ある程度読めていた。また、音の響きや意味と響きの重なり。今回の教材は、音、表記、語り手の二重性など、読むべきところが多くある短歌である。教室空間で生徒同士や教員と生徒など、いろいろな形の対話ができることを目指している。



<参観者の発言>（→のあとは、授業者が返答した内容）

*結論の部分で、教師主導で一定の見解へ導かれたが、生徒から出た「十五歳の良いことも悪いこともすべて吸われてなくなった」といった解釈に帰着させてもよかったのではないかと。

→説得力があるかどうかだと思う。指導者としては読みの根拠を示したので、生徒がそれに反論してくれればいい。

*生徒がのびのびと活発に発言していた点と教師が生徒の意見をそのまま（良い悪いを問わず）板書していた点がよかった。

→できるだけ生徒のことばをそのまま示して、議論させるようにしている。本当は生徒自身でボードなどを利用して書くのがいい。

*韻律を根拠に示すならば、音読をしたり、他の例を示して「う」「お」の音の響きを確認させるとよかったのではないかと。

→音読を重視するべきなのはそのとおりである。これからさまざまな教材を学習していく中で、音の響きの効果などを獲得させていきたい。

*虚構作品として、「話者」を押さえ、俳句につなげていくのがよい。

*グループワークの祭、意図をもってグループ分けされているか。

→グループは意図を持って分けるのが理想。中高ではなかなか難しいが工夫をすればできるだろう。こんな人と話ができるようになってほしい。このクラスの班は、一時間ずつ場所をずらして違うメンバーになるようにしている。班長もだれもができるように教員が指定している。また、誰が発表者になってもいいように緊張感をもたせている。

*ふりかえりがあったほうがよかったのではないかと。

*盛りだくさんのことが歯切れ良く展開されている。「なぜ？」という問いを持って生徒が取り組んでいるのがよかった。

*多くの内容を盛り込んでいたので、「構成読み」を減らして、「技法読み」を増やせばよかったのではないかと。

→時間があれば、構成読みで1時間、技法読みで1時間が理想。

*このあと「俳句」はどのように展開するのか？

→二句ほどを授業で教師が読み方を教えて、あとは生徒に読ませる。「転」をとらえて、「音」の響きや「比喩」などの表現技法、「変化」をとらえさせたい。やり方を教えることで生徒が自分で読めるようになることを目指す。

（記録 立命館中高 野村康代）

◇<研究授業Ⅰ 授業者の感想>

石川啄木の短歌を対話的な検討のなかで深く読み取り、生徒一人一人が言葉にこだわって自分の読みを創り出すことを目指した。韻文は言葉の意味だけでなく、声に出して読んだときの聴覚的效果、文字や改行・空白などの視覚的效果も重要であると教えてきた。今回、生徒達は行の長短や「不來方」という特殊な表記の効果などの視覚的な要素にも、目を向けることができていた。

自分の読みを創る文学的な楽しみのある授業を目指して、これからも教師として学び、実践を積み重ねていきたい。

◇【研究授業Ⅱの様子】

チャイムが鳴り、挨拶の後、前時の振り返り。「貧しさも豊かさも、どちらも地球環境問題の原因である。それ故、先進国と途上国が責任の押し付け合いばかりしては、問題は解決できない。解決するには『豊かさ』についての価値観の転換が必要である。それでは、物質的な豊かさや利便性の追求をよしとする従来の価値観に替わる、新たな価値観とは何か。」

まずは第4段落（最終段落）の「マル読み」。句点を境に次々と読み手が替わっていく音読方法である。座ったままの生徒の声では、やや音量的に物足りない気もするが、途切れなくつながれていく言葉のリレーは、それはそれで心地よいものである。生徒達もゲーム感覚で楽しみながら、互いの読みを共有しているように見受けられた。板書しながらの発問。授業者からの問いは、常に不特定の生徒全員に向けて発せられていたが、日頃から「全員が一度は発言する機会を」をモットーに学習を進めてきたというだけあって、自然とどこからか解答が返ってくる。



筆者の提示する新たな価値観、それは「つながり」即ち関係性に価値を置くというものである。そして大事なのは「正しく」つなげること、先進国と途上国との平等な相互依存関係を築くことである。それを確認した後、授業者は筆者の提言を自らの問題として捉え直すよう生徒達に促すために、様々な仕掛けを繰り出してゆく。

*第1の仕掛け：GLコース在籍生徒の体験談の引用

生徒1「人間にとって一番大切なのは精神的豊かさである。」

生徒2「幸せとは様々な人と人とのつながりの中で形成されてゆくもので、周りが幸せだと他の人にもその幸せが伝染していく。」

生徒3「幸せ(本当の豊かさ)とは『愛に溢れること』だと教わった。」

生徒4「『心の復興』のために、笑顔や気持ちなどの才能を表現・発揮できることこそが、本当の豊かさであり、幸せである。」

GLコースならではの国際的取組から得られた知見は、本時の学習内容と見事に重なり合うものである。そして、それが同級生の体験談であるだけに、生徒達も否応なしに自らの問題として引き受けざるを得ないことになる。

*第2の仕掛け：クラスメイトによる修学旅行での体験談の発表

生徒1・・・ラオスでの活動（バンカン小学校、デッカバー孤児院訪問等）の概要説明。

生徒2・・・バンカン小学校訪問での体験談。

生徒3・・・デッカバー孤児院訪問での体験談。

パワーポインターを自在に駆使したプレゼンテーションでは、事前に用意しておいたゲームで交流を図り、現地語でのコミュニケーションも試みたことなどが報告された。

孤児院では、予め校内で寄付を募って持参した文房具等を配布したが、心配された喧嘩や独占が生じる様子もなく、子どもたちの間にトラブルを避ける知恵が育まれている様子が窺われたとのこと。そして、それらを踏まえた「『貧困＝不幸』とは限らない」という発表者の言葉は、本時の学習内容ともよくリンクしており、大変印象的であった。但し、小学校の子どもたちとの服装の差異や、観光客によるお菓子配布が習慣化している実態には、やや複雑な思いも抱いたようであった。



発表全体を通して、自分達の体験を自分達の言葉で語る主体的な姿勢には大いに感心した。受け手の生徒達もクラスメイトの体験談ということもあり、皆が真剣に聴き入っていた。

以上、2つの仕掛けを経て、授業者はいよいよまとめに入る。残り時間も僅かとなり、少々窮屈な感は否めなかったが、コメント・シートを配布し、生徒達に発表への感想と「自分自身に何かできることはないか」という問いかけへの回答を記入させる。机間巡視しながら筆記を促す中、生徒達は皆真面目に取り組んでいた。

◇【研究授業Ⅱの合評会】（司会 立命館中高 松井陽政）

<授業者からのコメント>

まずは授業者から、本時に至るまでの批判的・多面的な評論読解の積み重ねについて説明があり、修学旅行でのプレゼンテーション体験を活かして今回の発表にチャレンジさせるまでの流れが語られた。その後、参加者との質疑応答が行われたが、その過程で、生徒の自主性を育む本校修学旅行の特長や、2年次国語表現における論文作成に至るアクティブ・ラーニングの実践が司会者から説明され、本時プレゼンテーションの背景にあるものへの共通理解が得られるかたちとなった。

<参観者からの発言>

参加者からは、パワーポインターをいとも簡単に操り、物怖じせずに発表する生徒達への感嘆の声が聞かれたが、中でも生徒同士で触発し合う能動的学習姿勢への評価には高いものがあった。「生徒達は日頃から問題意識をもって活動しているのか」という質問に対しては、本校リビオの活動なども紹介され、その関心が一過性のものではないことが強調された。その他、パソコンの生徒使用環境に関する質問に対しては、各教室のタブレット使用やメディア・ラボの活用状況、無線LANの整備などについての説明がなされた。

教材に関わっては、「生徒がどのレベルの『つながり』まで理解できたらよしとするのか」、「『しあわせ』『幸福』などの定義しづらい語が多用されており、もっと批判的に読むことも可能ではないか」などの質問も出たが、これらに対しては、本教材を「生徒達が世界の貧困を身近な問題として個々に考えるきっかけにしたい」との展望を述べることで応えた。

中には、生徒の声の小ささや発表の分かりにくかった箇所に着目して、教師の更なるフォローの必要性を説く意見や、本時の内容を時間内に収めようとするあまり、窮屈な時間配分になってしまったのでは、との指摘もあったが、概ね好意的な意見が多かった。（記録 立命館中高 長浦亮公）

◇<研究授業Ⅱ 授業者の感想>

生徒たちに助けられた授業展開になったと感じています。生徒たちに感謝しています。

授業展開がスムーズにいくよう、積極的に発言や音読に参画し、発表者も全体に伝わるようにパワーポイントを用いて創意工夫できていました。今後も私自身、生徒たちから様々なことを学んでいきたいです。そして現在、私の課題は深い学びにつながる発問づくりができるかどうかといった点だと思っています。実践の学びを通して研鑽を積んでいきたいです。

【編集 附属校教育研究・研修センター 研究部門長 今宿純男】